

飯盛山と白虎隊の少年たち

白虎隊(白虎隊)は、主に 15 歳から 17 歳の少年で構成された部隊でした。彼らは、徳川幕府軍とその支配に反対する勢力との戦いであった戊辰戦争(1868-1869)に参加した会津武家の息子たちでした。飯盛山は、部隊から切り離されて自害した白虎隊隊員 19 名の永眠の地です。グループの 1 人は生き残り、悲劇的な事件について語り継ぎました。今日、白虎隊は会津武士精神の不朽の象徴です。訪れる人は、山頂への階段をハイキングするか、小額の料金でエスカレーターを利用し、山に上り、その少年たちの墓地に敬意を表することができます。

大名領主松平容保(1836-1893)は、年齢ごとに軍隊を 4 つの部隊に編成しました。白虎隊はこれらの中で最年少であり、当初は戊辰戦争での予備軍として意図されていました。しかし、1868 年の秋までに、ほとんどの会津軍は領内の他の地域で戦っており、鶴ヶ城と町を守るためには白虎隊を含む約 3,000 の軍隊しか残っていませんでした。10 月、親幕府軍が城を包囲し、白虎隊自身も領主と家族を守るために戦っていました。

苦渋の決断

会津若松の北東にある村、戸ノ口原の戦いの後、白虎隊のうちの 1 つの分隊の 20 人のメンバーが他の部隊から分離されました。小さな暗い峡谷の深い水の中を逃げた後、少年たちは飯盛山の頂上に登りました。見下ろすと町から煙が上がっているのが見え、彼らは城が敵に倒れて燃えているのだと信じ、狼狽えました。実際には、城はまだ立っていて、煙は近くの家から来ていました。しかし、少年たちはすべてが失われたと考え、敵に降伏する代わりに自らの命を絶ちました。

物語の多くの説明は、少年たちが命を絶った劇的な方法に焦点を当てていますが、研究者はこの出来事の詳細な情報を提供しています。彼らは、グループの全員が最初に決定を支持したわけではないと信じています。白虎隊は武士の理想に従うように育てられ、教育を受けましたが、同時に活発で経験の浅い 10 代の若者の多様なグループでもありました。少年たちは最終的な行動方針について、不本意な合意に達する前におそらくさまざまな選択肢について話し合ったことでしょう。飯沼貞吉(1854-1931)は、地元の女性によって見つけられ偶然救出された白虎隊の唯一の生存者でした。貞吉は生涯、仲間を失った悲しみを抱えながらも、家族を持ち、通信業界で成功を収めました。彼の死後、彼は他の 19 人のメンバーが眠る飯盛山に埋葬されました。

飯盛山からは、少年たちが生きた 1868 年当時と変わらない会津若松の町並みを見渡すことができます。近くには、白蛇を五穀豊穡の神として祀る宇賀神堂があります。山の麓には白虎隊記念館と、風光明媚なさざえ堂があります。記念館には白虎隊と戊辰戦争に関する史料や遺品が展示されています。